

序

人は物心がつくような年齢になると、誰でもいろいろな疑問をもつようになる。ある事象の存在が気になりだしたら、何らかの形で自らとの関わりを問題にしていることを意味する。基本的には自身の identification である。そこには対象を識別するための「何」といった疑問から、現象を確認するための「何故」といった疑問がある。「何」はどちらかと言えば価値とは無縁であるが、「何故」にはある種の価値観をとともなう。純粋な知的関心からであろうと利害関係からであろうと、現状において納得の得られない現象の解明とそれによって安心感を得ることを目的に、現象の持つ意味を問題としている。現象の存在理由あるいは価値の追求である。

だからと言って、明快な説明が得られない場合、現象を否定してしまうことは危険である。たとえば納得できないという理由で、その存在を否定するといったことは、よく人間社会でみられるが、否定されたものの価値の逆転はしばしば歴史に見られるところである。他者の存在に疑問をもつのは利害関係から自己と共存できない理由とか何らかの違和感のある場合が多い。それは必ずしも自己以外の他者に対してだけでなく自分自身に対してでも成立する。To be or not to be, that is the question. といった本質的な命題であり、何故あるのか、何故生きるのかといった類の疑問である。しかしそれは常に答えられるとは限らない。

「何故山に登るのか」という問いに「山がそこにあるから」と答えたのは、1921年第1回エベレスト遠征隊員だったイギリスのジョージ・マローリー (1886~1924) である。1924年3回目のエベレスト登山で帰らぬ人となったが、この対応にもある種の知的関心に基づく identification が背景となっている。こうした「何故」の繰り返しによってさまざまな現象の説明がなされ、人知は拓かれ人間の文明は築かれてきたのである。

実は企業の組織でも似たようなところがある。ある部門は何故必要かといった疑問のたされることがある。常に活性化された組織であるために、組織の見直しは必要である。しかし景気のよい時には力を入れ、悪い時には後退するといったファッション的な経営戦略では、なじまない部門もある。とはいえ研究所が何故必要かといった素朴な疑問に十分こたえるだけの identification は、社会にはまだ確立されていないといってよい。

1994年4月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士 太田利彦